

若様の死

野村胡堂

—

「親分、ぜひ逢いたいという人があるんだが——」

初冬の日向ひなたを追いながら、退屈しのぎの粉煙草を燻くゆらしている銭形平次の鼻の先に、ガラツ八の八五郎は、神妙らしく膝ひざつ小僧を揃えるのでした。

「逢ってやりや宜いじゃねえか、遠慮することはあるめえ、——
相手は新造しんぞか年増か、それとも婆さんか」

「あつしじゃありませんよ。銭形の親分に逢いたいんだそうので、染井からわざわざ神田まで、馬に喰くわせるほど握り飯しよを背負しょって来ましたよ」

八五郎は自分の肩越しに、拇指おやゆびで入口の方を指しました。

「堅い方だな、よくよくの事があつて遠方から来なすつたんだろう。洗足すすぎだら盥らいは洗濯物で一杯だ、すまねえが井戸端へ案内して、足を洗すすつたらここへ通すが宜い」

平次がそう言うのも待たず、

「恐れ入りますが親分さん、私はここで御免ごうむを蒙こうむります——明るいうちに帰らないと、婆アが心配をいたしますので。へ、へ、へ」
妙な苦笑いといっしょに、洪紙張しふがみはりにしたような五十恰好の老爺おやじが一人、木戸を押し開けて、縁側の方へ顔を出しました。

「そこでも構まわらないが、陽が当あつて少し眩まぶしかろう」

「へエ、天道様に照らし付けられるのは、馴なれておりますので」
「なるほど、そう言えば狭い家の中よりは、埃ちりっぽい江戸の街中

でも、外の方が氣持がよからう、——とところで、あつしに用事というのは何だえ、爺さん」

平次は煙草盆と座布団を持って、気軽に縁側へ出て行きました。「染井のお百姓で、仁兵衛さんというんだそうですよ。知合から知合を辿って、向柳原の叔母さんのところへ来て、——お前さんに伝手があるちゅう話を聞いて来たが、錢形の親分さんに逢わせて貰れえ度え、お礼はなんぼでもするだから——と背負って来たのは一と抱えほどの化けそうな人參と牛蒡——」

八五郎はツイ手真似になるのでした。

「お前は引込んで居ろ、馬鹿野郎。そんなに思い詰めて来なすつたんだ、冷かしたり何んかすると承知しないぞ」

「へエ」

「爺さん、気にしないで下さいよ。この野郎は賢こそうな口をきいているが、心が少しばかり足りないんだから——」

「そうかね、見たところはそれほどでもないが、氣の毒なこつたね」

「へエツ、悔みまで言われちゃ世話アねえ」

八五郎はプイと横の方を向きました。

「さて、爺さん、私に用事というのは？」

「有難うございます。そう御親切にして頂くと私も染井くんんだりから来た甲斐があります。実は親分さん、私の伴の文三の行方を突き留めて頂きたいのでございますが——」

「その文三さんとやは、年は幾つで、何時、何処へ行きなすつたのだ」

「一年前、巢鴨庚申塚の赤塚三右衛門様のところへ、奉公に参り

ましたが――」

「武家奉公だな」

「武家と申しても、赤塚様は豪士で、公方様からも格別の御会積のある家柄でございますが、江戸開府前からの土着で、別に何処からも扶持ふちを貰って居るわけではございません」

「そこへ下男奉公にでも出したというのか」

「俵の文三はそのとき十九、百姓の子のくせに華奢きゃしゃな育ちで、武家奉公の出来る柄ではございませんが、赤塚様ではたいそうなお気に入りで、若様の数馬様のお相手にするから、たつてと申しませぬ。私どものような百姓の子に、学問武芸も仕込み、行く行くは用人に取立てるからというお話でございました」

「？」

「で、それにお手当が大変でございました。一本立の武家奉公でも、当節は年四両の給金は上の部でございますが、赤塚様では年に十両の給金を出した上、支度金が三十両」

「それはまた大層な気張りようだな」

その頃三十金と言え、安御家人ごけにんの収入で、大家の嫁入支度でも、それほど掛けると人の目を引きます。

「私も年貢ねんぐや借金やらが嵩かさんで、さんざん苦しんだ時でもあり、たった一人の俵ですが、ツイ奉公に出す気になりました。どうせ家へ置いたところで、百姓仕事の出来る俵でもございません。私どもの子にしてはとんだ変り種で、江戸の何んとかいうお役者衆に似ているとやら、村中の娘たちに大騒ぎをされている好い男でございます」

「それは又」

平次も挨拶に困りました。八五郎は鼻の下を長くして、眼をパチパチさせながら、面白そうに聴いております。

「その伴が、去年の秋奉公に上がったきり、一年あまりになりませんが、一度も家へ帰してもらえないのでございます。町家の小僧奉公でも、年に二度の藪入やぶいりがございます。それが親許へ帰してくれないばかりでなく、此方から逢いに行っても、何んとかかんとか言って、どうしても逢わして下さいません」

「誰がそんな事を指図するのだ」

「御用人の久賀くが弥門やもん様のお取はからいでございます。尤も御主人もつとの赤塚三右衛門様は、もう七十近いお年寄で、その上中風の気味で休んだきりだと伺っております」

「で、その文三とやら、お前さんの息子さんから手紙くらいは来るだろう」

「へエ、折々手紙は参ります。たしかに伴の筆跡てで——檀那寺だんなの和尚様にも褒められました。伴は字もよく書きます、ここへ一本持って参りましたが——」

百姓仁兵衛が縁側の上にひろげたのは、半切一枚に書いた至って簡単な手紙で、親が自慢するだけ筆跡もよく書いてありますが、文句は通り一ぺんの時見舞と、私のことは心配してくれるな、主人は親切で、何んの不自由もない——というだけ、そう思っていると誠に味も素気もない、空々そらぞらしい文句です。

「人に見張られながら書いたような文句だな、——ほかに気の付いた事はないのかな」

「折々手紙に添えて金を送って参りましたが、五両三両の小遣こづかいより、私と婆さんの心持にしては、たった一ぺんでも宜いから、伴

の顔を見度い心持で一ぱいでございます。この秋になってからは、婆さんが夢見が悪いと申しまして、うるさく倅の事を申しますので、三四度つづけ様に赤塚様へ参りますと、用事があって大阪へやったが、用事は混み入っているから帰りの程もわからないという、木で鼻の御挨拶でございます。大阪はどこに居るのかと訊ねましたが、それは教えてくれません」

「フム」

平次も腕を拱こまぬいてしまいました。何んか仔細しさいがありそうですが、それだけではどう手の付けようもありません。

「それだけなら、私も心配はいたしません、大阪へ行っているという倅の姿を、私はこの眼で、確かに見たのでございます」

「それは何時のことだ、場所は？」

「三日前でございました。倅は大阪へ行っていると言われて、庚こう申塚しんづかの赤塚様から、がっかりして帰りかけた時でございました。

門を出ようとして、何心なくフト振り返ると、お庭の植込の間から紛まぎれもない倅文三の顔が、なつかしそうに私の方を見ているでございませんか、ハツとして駆け戻ろうとすると、私の眼の前に立ち塞ふさがったのは、御用人の久賀弥門様でございました。——倅があすこに居るじゃございませんか、一と眼逢わして下さい——

——と申しますと、——とんでもない、あれは当お屋敷の若様で数馬様と仰しゃる方だ、其方そのほうの倅文三とよく似てはいらっしゃるが、若様は人品骨柄が違い、それに左の頬に目につくほどの黒子ほくろがある。お前の倅と間違えるなどはとんでもないことだ——といやもう散々のお叱りでございました」

「——」

「でも、私にはあれがどうしても倅の文三と思えてなりません。一応は若様にお目にかかりたいと強^たって申上げましたが、剣もほろろの御挨拶で、がっかりして戻って来ると、その翌る日は御屋敷からの手当として、思いも寄らぬお金が十両届きました。盆でも暮でもないのに、それも疑えば変でないことでもございませぬ。いろいろ考え抜いた末、知合の者が八五郎親分の叔母さんに手蔓^{てづる}がある^てと申しますので、思いきってお願いに参りました。私はこの目で三日前に見かけた倅に何んの変りもある筈はございませぬが、あのままにして置くと、どんな事になるか心配でなりません。親分さんのお力で、倅を取戻して頂くなり、それが出来なければ、せめて倅の安否^{あんび}も知り、逢った上でこの先武家奉公するものか、得心づくで事を決め度いと存じます。何うしたものでございましょう親分さん」

仁兵衛老爺は縁側に手をついて、折入った様子で頼み込むのでした。

「成程そいつは心配だろうが、旗本でも大名でもないと言っても、赤塚様は江戸の名家だ。町方の御用聞が、いきなり踏込んで調べ^べるわけにも行くまい。もう少し様子を見ることにしては何うだ」

「へエ」

「その代り、少し心の足りない野郎だが、しばらくの間、八五郎に赤塚の屋敷を見張らせることにしては何うだ」

「へッ、少し足りない野郎でも、間に合いますか、親分」

八五郎は甚^{はなは}だ穩かでない顎^{あご}を突き出します。

「まア、不足を言うなよ。足りない様な顔をして、相手に油断をさせるのは、孔明楠^{こうめいくすのき}以来の兵法だ」

「ありがたい仕合せで」

「そう願えれば、有難いことですが——さいわい庚申塚こうしんづかには、私の別懇べっこんにして居る家もございます。八五郎親分のお宿をさせて、精いっぱいの御馳走をさせることにいたしましょう」

「そいつは有難いね爺さんとっ、思ったよりお前さんは話せるね」

「皆さんがそう仰しゃいますで、ヘッヘッ」

染井の百姓仁兵衛は、八五郎といっしょに出て行きました。これが世にも不思議な事件の緒口いとぐちになろうとは、もとより平次も八五郎も知る由はありません。

二

それから四日目、十一月の十三日のことでした。

「あ、驚いた。親分の前めえだが、巢鴨から神田迄駆けて来ると、ずいぶん腹が減るぜ」

八五郎が寒天に大汗を掻いて飛込んだのです。

「何が始まったんだ」

平次は日向ひなたのとぐろを解きました。

「殺しですよ。赤塚三右衛門の伴が殺されたんで——あ、あ、腹が減った」

「呆あきれた野郎だ、合の手が多くて話の筋が通りやしない、——お静、冷飯の残ったのがあるだろう。お菜かすの苦労なんか要るものか、沢庵たくわんと目差しでたくさんだとも、——さア話せ、赤塚の伴がどうしたんだ」

「今話しますよ。食うのとしゃべるのとは一緒には出来ませんよ、

生憎口は一つだ」

「不自由な野郎じゃないか。鼻で食いながら口で話すんだ」

「無理だね、親分」

食い続けながらも八五郎は報告しました。

昨夜赤塚三右衛門の俵数馬が、月に浮かれたか、フラフラと庭に出たところを、何者とも知れぬ曲者に、背後から一と突きに突き殺されたというのです。

「それをお前は見たのか」

「見付けたのは今朝だ。そのまま家中の者の口を塞ぎ、急病で死んだことにして、葬式の支度をしたのを、下女のお吉というのから聴いて、土地の御用聞大塚の友吉を走らせ、変死の疑いがあるから、検屍前は葬いを受け付けられないようにと、檀那寺に言い含め、あつしは朝飯も食わずにここまで飛んで来ましたよ。ともかく行って見て下さい、親分。よっほど臭いことがありますですよ」

八五郎の報告は箸を動かしながら一と通り済みしました。

「朝飯を食わずに駆け付けたのをたいそう恩に着せるじゃないか、——とところで、旗本や大名とは違うにしても、公方様格別の御会釈という赤塚家だ。十手捕縄を振り廻して乗込むわけにも行くまい。お前は一と足先へ行ってくれ。俺は八丁堀へ廻って、笹野の旦那のお供でもして行こう」

「それなら宜い塩梅で、笹野の旦那（与力筆頭笹野新三郎）は明日の御成の御検分で、伝通院に御出役になって居ります。先刻途中でお目にかかって申上げると、直ぐ平次をつれて来るように、ここの検分はすぐ済むだろうからというお言葉で——」

「そいつは有難い」

平次はさつそく支度にかかりました。

伝通院で笹野新三郎に逢い、三人道を急いで巢鴨庚申塚こうしんづかに着いたのは、昼少し過ぎでした。

赤塚家は倅数馬の変死を、さすがに隠しきれなかったものか、何んとなく物々しいたたずまいですが、それでも苗字帯刀みょうじたいとうの豪士の威勢に押されて、土地の御用聞大塚の友吉も、無理に掻き廻しもならず、持て余し気味に見張っております。

与力筆頭笹野新三郎が出役となれば、多寡たかが豪士けんしきの見識も文句もありません。

「拙者は与力笹野新三郎」

「それはそれは御苦勞に存じます。主人三右衛門は老病にて臥ふせっておりますので、久賀弥門代つて御挨拶をいたします」

頑固がんこ一徹てつらしい用人の五十男は、真四角にそれを迎えました。土塀めくを繞らした嚴重な構えで、小さい大名の下屋敷ほどありませんが、扶持ふちも禄米もない赤塚家は、大地主として暮しを立てているので、家の造りも調度も、何んとなく百姓家らしい感じがあります。

「ところで、御子息数馬殿不慮の御災難を被こつむられたと承うけたまわったが、御遺骸は？」

「この方にお出でを願いたい」
案内したのは二た間三間を隔てた奥でした。無言で唐紙を開けて、無言で指した一と間は、思いきや至って粗末な六畳で、型の如く廻した逆さ屏風さかの中に、まだ入棺しない死骸が横たえてあります。

「あれは？」

笹野新三郎以下三人の姿を見ると、屏風の中からハッと驚いたように立上がって、アタフタと廊下に消えたのは、今まで泣いていたらしい、眼の覚めるような娘。それは十八九にもなるでしようか、身のこなしの軽捷な、嘆きのうちにも愛嬌と明るさを失わない、世にも可愛らしい処女でした。粗末な木綿物の袴も、少し山の入った帯も、この娘の身につけることによって、高貴な上品さを持つと言った、それは不思議な魅力の持主です。

「当家の掛り人、駒と申します」

久賀弥門はむずかしく答えました。

笹野新三郎の眼の合図で、銭形平次は死骸の側に進みました。片手拝みに黙禱をささげて、胸へかけた薄いものを剥ぐと、傷は背中——左の肩胛骨の下から一と突き、心の臓をえぐった様子ですから、まさに一とたまりもなかったでしょう。

「刃先に乱れも狂いもありません。曲者は武芸の心得相当と見えます」

平次は独り言のように言いました。

「左様か」

と新三郎。

殺された数馬というのは、十九というにしては少し老けておりますが、細面の鼻の高い、眉の秀でた美男で、月代の跡の青々としたのも、頬の豊かなのも何んとなく痛々しい感じです。

「左の頬の黒子——これは刺青ではないか」

銭形平次の言葉は並居る人を驚かしました。若様数馬の左の頬には目に立つほどの黒子がある——と百姓仁兵衛からも聞きました。だが、死体の頬の黒子というのは、側へ寄って見ると、これは紛

れない刺青いれずみです。眼尻から少し下がった左の高頬、それは豆粒ほどの大きさですが、場所だけによく目につきます。

「そんな事はございません。若様はその黒子を大変気になすって、針で掘って取ろうとなすったようですから、その跡が刺青のように見えるのでございましょう」

久賀弥門の説明に、平次は大して耳を傾かたむける様子もなく、

「若様は武芸などをおやりかな」

「いえ、生れ付き御病身で、武芸のお励はげみはなさいません」

「それでは百姓の仕事などは」

「とんでもないことで」

「それにしても手が荒れて居るようだが——」

平次は死骸の指などを念入りに見ておりました。

三

久賀弥門の案内で、三人は数馬が殺されたあたりを見るために、庭へ出て見ました。

「戸締りはどうなってるだろう」

「嚴重でございます、——実は当赤塚家には、先代から怨うらみを結んだ敵がありますので、戸締りだけは嚴重の上にも嚴重を極め、ことに若様は、日中もお一人では外へ出ないようにはいたしておりました」

「その敵というのは？」

笹野新三郎は聴耳を立てました。いや、用人久賀弥門の調子には、この反問はんもんを待ち構えたような、妙な含ふくみがあったのです。

「何も彼も申し上げた方が宜しいと存じます——、実は当主赤塚三右衛門には、三十年前家督を争った相手がございます。当主三右衛門は幸い赤塚家先代の鑑識めがねに叶かなって当家の婿養子となり、赤塚家を継いで三人の子をもうけましたが、赤塚家の家督を争った相手は、それを根に持って、事毎に当家に仇をし、三十年に亘わたって争い続けて参りました」

「——」
笹野新三郎も、銭形平次も黙ってしまいました。三十年前、赤塚の娘と、その身上しんしよを争った恋と欲との怨みが、まだ続いて居るといふことは、常人にはちよつと想像もつかない事です。

「赤塚家の三人のお子様、十次郎様、織江様は、今から三年前、半歳のうちに亡くなりました。十次郎様は水死、織江様おりえは中毒、どちらも疑わしい死に様でございました」

「——」
「後に残った、たった一人の御跡取の数馬様にも、いろいろの災難がつづきました、——例えば理由もなく往来で喧嘩をふっかけられたり、材木屋の路地を通るとき、いきなり頭の上へ材木が崩れて来たり、朝の御食事に、石見銀山崩取いわみが入っていたり——」

「その怨みの相手というのは？」
すかさず笹野新三郎が突っ込みました。

「申上げても一向に差支ないと存じます。——当家の主人三右衛門様の従弟いとこに当られる山浦甚六郎様」

「それは何処いどこに居られる」

「小石川駕籠町に浪宅を構えていると承わっております」

「あとで調べるがよい」

新三郎は平次を顧み^{かえり}ます。話のうちに、広い庭を横ぎって、四人は深い植込みの前に立ちました。

「この辺でございました」

久賀弥門の指さしたあたり、末枯れた草が血を浴びて、紫色に光って居る外はほとんど何んの変りもありません。

「数馬様もときどきは夜分独りで外へ出られたんでしようね」

平次は誰へともなく訊きました。

「とんでもない。昼さえ滅多^{めった}に外へ出られないように、嚴重に申上げております」

「すると誰か誘^{さそ}い出しでもしたのかな」

「今夜の月は格別だ、少し寒いが——などと、宵のうちに弥太郎は申しておりましたが」

「弥太郎、——それは？」

「私の件でございます。ちょうど其処へ参りました」

久賀弥門の引合せたのは、二十二三の逞^{たく}ましい青年でした。これは殺された若様の数馬とは反対に、男っ振よりは腕っ節に物を言わせる方で、醜^{みにく}い顔や、弾力的な長身に、何んとなく人を人臭いとも思わぬところがあります。

「父上、堀^{へい}の崩れを見付けましたが」

弥太郎は植込みの奥の方を指さしながら、実は笹野新三郎や銭形平次に注意するように斯う言うのでした。

「それは有難い。曲者の忍び込んだ場所がわかれば、また考えようもあるう」

弥太郎に案内されて、深い植込みの中へ入ると、その辺は古い落葉^{くさ}が腐ったままで、さすがに植木屋の手も届かなかったものか、

曲者の足跡などを見付けるとたよりもありません。

「この通り」

指さしたあたり、成程土塀の上に置いた瓦は十数枚落ちて、腐葉土の上に滅茶滅茶に割れております。

「八、お前の肩を貸せ」

「何をやるんで？」

「塀の外を見たい」

八五郎は物馴れた調子で土塀にピタリと添そって立つと、平次はその帯の結び目を踏んで、八五郎の肩の上に立ちました。胸から上は塀の上へ出て、外はひと眼で判ります。

「足跡でもあるんですか、親分」

「いや、草が深いから足跡は見えないが、俺は瓦の落ち具合を見たかったんだ。案の定外には二三枚瓦が落ちただけだ、それも草の上へ落ちているから、一枚も割れていないよ」

平次はそんな事を言いながら、身軽に八五郎の肩から飛降ります。

「外に変わったことは？」

笹野新三郎が訊ねます。

「この辺に刃物があるような気がしてなりません。八、来ないか」
「へエ」

平次は笹野新三郎と大塚の友吉を庭に残して、八五郎と二人、ざっと土塀の内側をひと廻りしました。

「こんなことで刃物が見付かるでしょうか、——それに曲者は武芸のできる奴なら、刃物なんかを捨てて逃げる筈はないじゃありませんか」

深い葉や木立や草叢くさむらを分けるのが面倒臭くなつたか、八五郎は少しブウブウ言います。

「いや、曲者は刃物をこの辺に捨てた筈だ——捨てるとなれば、大方見当のあるものだ。誰にも思い付かれない、途方もないところに捨てたつもりでも、人間の考えには大方筋道がある。途方もないところほど見付け易いわけだ」

平次は門の外へ出ると、今度は土塀に添って、草叢や畑をグルリと一と廻りします。

一度崩れた箇所どぶの反対側へ出た時、

「八、その溝どぶを見てくれ、多分その辺だろう」

平次の指さしたのは、塀の内から大きな榎えのきの枝が差出たあたり、塀から二間ばかり離れて流れて居る、三尺ほどの溝川でした。溝と言つても溜漕かんがい用の小流れで、底に目高の遊ぶのも数えられるほどに澄んで居ります。

「こいつは驚いた、天眼通ですね、——ありましたよ、親分」

八五郎は葉に隠れた溝の中から、手頃の脇差を見付けて、雫しずくをきつて差上げました。

「抜いて見ろ」

「紐ひもで鞘さやを縛つて居ますよ。おや、おや、中身は大変あふらな脂だ」

「人を斬つた刃物だ、どれ」

平次はその脇差を受取ると、何やら八五郎に囁きます。

「染井へ行くんですか。え、一刻ときもありや眼をつぶつても行つて来ますよ」

「じゃ頼むぜ、俺はその間に駕籠町へ行つて来る」

「合点」

八五郎の気の軽さ、そこから畑の中の径をみち一散に飛びます。

四

「この脇差を御存じで？」

平次が持って来た濡れた一と腰、用人久賀弥門は一と眼見ると、サツと顔色を変えました。

「それは」

「誰の物でしょう、御用人」

「確かに見覚えがある。当家をうら怨む、山浦甚六郎様の差料に相違御座らぬ」

「間違いはありませんでしょうね」

「間違いはない」

久賀弥門の言葉には自信がみ充ちております。

「私はちよつと駕籠町まで行つて参りますが、旦那はこうしんづか庚申塚の番所でお待ち下さいませんか、友吉に案内させますが」

「宜かろう」

平次の指図に従つて、もう少しこの事件の経過を見る気でしょう。笹野新三郎は大塚の友吉といつしよに出かけました。

それと別れて平次は、駕籠町に山浦甚六郎の浪宅を訪ねましたが、これは簡単にわかりました。

「拙者は山浦甚六郎だ。何んの用事か」

無精髯ぶしようひげの生えた中老人が、貧乏臭い破れ障子の蔭から顔を出したときは、銭形平次も驚きました。庚申塚の赤塚家の豪勢な暮しに比べると、あまりにもひどい違いようです。

「ゆうべ赤塚様の若様数馬様が殺されましたが、御存じですか」
平次の調子は率直そつちよくでした。

「聞いたよ。たった独りの子を気の毒だな」

山浦甚六郎は憮然ぶぜんとして居るのです。

「旦那はたいそう赤塚様を怨んで居なすったそうですが」

「怨んでいるよ、赤塚の家督や身上しんしょうは何うでも宜いが、あの三右衛門という男は、俺の許婚を横取りした奴だ——尤もつとも怨は父親の三右衛門にあるが、小倅などを怨んでいたわけではない。赤塚では二人の倅の変死したのを、この山浦甚六郎のせいにして居るそ
うだが、飛んでもない事だ。それは疑心暗鬼ぎしんあんきというものだ——自分の罪に責められる愚人ぐじんの悩みだ」

「もう一つ伺いますが、旦那は昨夜、何処にいらつしやいました」

「ハツハツハツ、町方御用聞の其方そのほうには気の毒だが、俺は数馬殺しせつつかみの下手人ではないよ。昨夜は番町の旧友きゅうゆう——今は出世して神尾撰津守せんづのかみとなっている神尾十三郎殿の許へ参って、碁ごを打って泊り込んで、今朝ここへ戻ったよ。神尾撰津守は御槍奉行おやりぶぎょうだ、拙者が泊り込んで、夜っぴて碁を打っていたことは、多勢の家来共が皆知って居る。行って訊いて見るが宜い」

「恐れ入りました。ではもう一つ、この脇差に御見覚えはあるでしょうか」

「どれどれ」

山浦甚六郎は濡れた脇差を受取って、打ちかえし打ちかえし眺めておりましたが、

「ある。これは赤塚家に伝わった、対ついでの脇差の一本だ。拙者のでなければ、従弟いとこの赤塚三右衛門のものだ」

「？」

「拙者のはこの通り此処にある。中身は無銘の相州物、目貫は赤銅と金で牡丹、柄糸は少し汚れたがそっくり其俣だろう」

山浦甚六郎は、側にあつた自分の脇差を取って平次に見せるのでした。濡れたのと濡れないのとの違いはありますが、それは中身も拵えも、そっくりそのままの脇差、甚六郎の言葉には少しの疑いようもありません。

「有難うございました」

「もう帰るのか、家捜しでもしては何うだ。赤塚の三右衛門奴、伴を殺したのは、山浦甚六郎に相違ないと言っても言っているだろう。馬鹿な奴だ、ハッハッハッ」

カラカラと笑い飛ばされて、平次は逃げ帰るほかはなかつたのです。

番所に帰るとちやうど染井から百姓仁兵衛を連れて八五郎も戻りました。

「サア、いよいよ大詰でございます。爺さんもいっしょに来るが宜い」

平次は先に立って笹野新三郎始め八五郎、友吉、仁兵衛を赤塚家に案内します。

「下手人の当りは付いたのか、平次」

笹野新三郎は少し不安そうでした。

「悉くわかりました。まことに質の悪い曲者でございます」

何やら平次には、腹の立ってたまらない様子が見えるのです。

もういちど赤塚家へ戻ると、百姓仁兵衛がいっしょに来たのを見て、用人久賀弥門、ひどく渋い顔をしました。が、笹野新三郎

が付いているので、それをどうすることもできません。

奥の一と間、もとのままの死骸を置いてあるところへ来ると、
「爺さん、お前の伴の御主人だ。死骸にお目にかかって、念仏の一つも上げてくれ」

「へエ」

平次に言われて、逆さ屏風の中に膝行寄った仁兵衛は、恐る恐る死骸の顔に掛けた白布を取りましたが、

「――」

ハッと息を吞んで、そのまま死骸の顔に見入って居るではありませんか。

「どうした、爺さん」

「倅ッ、――文三ッ。これ、どうしたのだ。誰がお前をこんな事にしたのだ」

仁兵衛はいきなり死骸の首を抱き上げると半狂乱の態でわめき立てるのです。

「よつく見ろ、それは本当にお前の倅か、似ていてもそうでないかも知れないぞ」

平次は、側から乗出します。仁兵衛の表情心持の動き、四方の空気まで、毛程も見落さじとする様子です。

「――自分の倅を見違えて宜いものか、これは私の倅の文三に間違いないだ。――頬に刺青か何んかあるが、右の耳朶に凍傷の跡があつて、左の手の小指が子供の時の怪我で曲って居ますだ。誰が何んと言つても、倅の文三に間違いはありませんえ」

仁兵衛は若者の死骸を抱きながら、掻き口説くのです。

「御用人、これはどうした事だ」

平次は後ろに小さくなっている久賀弥門を顧みましました。

「いくら家や主人が大事でも、顔形ちの似た他所の伴を騙してつれ込み、骸なきがらに黒子の代りに刺青までして、身代りにするのはひど過ぎはしないか」

「侍も百姓も、子の可愛さに変りはないぜ。赤塚だか黒塚だか知らないが、こんな家の一つや二つ叩き潰しやどうなるてんだ。自分たちの顎あごが可愛さに、人の伴を殺して済むかよ、御用人」

平次は何時にない威猛高だったのです。

「平次それはまず宜いとして、下手人は誰だ」

笹野新三郎は聴き兼ねて注意しました。

「身代りの若様——文三を外へ誘い出せる奴——ひと太刀で間違もなく文三を殺せる奴——曲者の逃げ道らしく、土塀の瓦を内から落した奴——本当に曲者が土塀を越えて忍び込んだのなら、瓦は半分以上外へ落ちなきやなりません。それに内側へ落ちた瓦のこわれようもひど過ぎますよ。柔かい土の上へ落ちた瓦が、あんなに粉微塵こなみじんになるものですか」

「まだありますよ。血染の脇差の始末に困って榎の枝の上から、塀外の溝どぶに投げ込んだ奴」

「それは誰だ」

「山浦甚六郎とかいう浪人者は何んにも知りやしません。あれは若いときこの家の主人と女の事で怨みを結んだか知れませんが、三十年経ってから、相手の伴を三人も殺すような悪党じゃありま

せん、——皆んなそう思ったのは此方のひがみからで」

「では誰だ」

「その娘に訊いて下さい、——お駒とか言いました。その娘さんは先刻、さつき文三の死骸の側で泣いておりました。その娘が文三を殺した下手人を知っている筈です。お駒さんと文三と懇ろねんごになるのを我慢のできなかつた人間が一人あつた筈です。——腕の立つ若い男、——主人の居間から、あの脇差を持出せる奴。土塀の崩れに内側から細工をした奴——あッ、八。逃すなッ」

娘お駒の視線に追われて、パツと逃出した男は、八五郎の糞力くそぢからに無手むずと組付かれました。

「あッ倅」

それは用人久賀弥門の倅、弥太郎の追い詰められた狐のような顔だったのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年十一月号 文藝春秋新社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部